Gakken 保育 Books

「このままの保育でいいの？」と思ったときに読む本

子ども主体の保育をつくる56の言葉

著 大豆生田啓友（玉川大学教授）

環境構成、あそび・生活、かかわりの
思い込みを見直してみませんか？

「ねば」「べき」な保育からワクワクする保育へ

Gakken

大豆生田啓友（玉川大学教授）

保育の思い込みを「子ども主体の保育」の視点で見直してみると…

序論　子ども主体の保育　大切にしたい3つの視点

1章　環境構成をもう一度、考えよう

2章　あそびと生活を見直してみよう

3章　発想の転換！　子どもとのかかわり

4歳児の室内環境を考えてみた！

一人の居場所づくりからクラス全体の活動が豊かに

めぐみこども園（福井県）

心の安全基地づくり

めぐみこども園では、２０２２年度から、それまでの一斉保育を子ども主体の保育に変えようと動き出しました。はじめに考えたのは、子ども一人一人が自分の興味・関心のあるあそびを探究できる環境を構成すること。好きなあそびとじっくりかかわれる場所は、一人一人の子どもの心が安心・安定する「心の安全基地」となります。

まずは、保育室に子どもの今の興味・関心に寄り添った製作や絵本のコーナーなどを構成することから始めました。

そして、２０２３年度には園庭改造に乗り出し、それまで広々とした運動場のような園庭だったところに、ビオトープや築山、休めるスペース、アトリエなどを作り、屋外でも子どもたちが好きな場所であそんだり、探索活動をしたりして楽しめる環境づくりに取り組んできました。

一人の興味からクラス全体の活動が豊かに

「どの子にとっても、居心地のよい環境であってほしい」。そんな担任の願いから、Rちゃんの居場所を保障しながらも、保育者が姿を見守れるよう、さまざまな環境の工夫をしていきました。保育室内にRちゃんのスペースをつくったことで、あそびの続きがすぐに始められ、昼食などのときも声をかけるとすぐに参加するようになっていきました。

ほかの子どもたちも、同じ室内のRちゃんの活動を見たり、ドキュメンテーションによって系統立ててRちゃんがどんな活動をしているかを知ったことで、徐々に一緒に活動する機会が増えました。

また、園でのRちゃんの活動を心配していた保護者が、ドキュメンテーションを見ることで、「Rちゃんらしさ」を尊重してくれるようになったことも大きな変化でした。「こんなおもしろいことをしていたんだね」と保護者が認めたことで、自信をもち、ピースタイムで自分から「古代生物ミュージアムに行こう！」と発言できたのではないでしょうか。

クラゲ専門店のKさんとの活動は、これをきっかけに地域の人々の季節行事への参加、ワークショップなど園主催の催しへの参加など、多方面にわたるようになり、Rちゃんだけにとどまらず、4歳児クラスやほかのクラスの子どもたちも巻き込むようになっていきました。

Rちゃんの環境構成を考えることから始まった活動が、ほかの子どもたちにも豊かなあそびと学びの機会を与えてくれています。

⬆古代生物ミュージアムで、クラゲや古代生物の展示を熱心に見学する子どもたち。

あそび・生活の思い込み

5歳児クラスになったら椅子に座る練習をする？

小学校に入ったら、45分間席に座っていることが求められるので、5歳児クラスになったら、座る練習を始めるという園があります。でも、座れることが最終目標って、どうなのでしょうか？

保育のkey word 34

主体的・協働的な活動があることで、自然と座って話をする場が生まれる

座るための練習ではなく、他者の話を聴く必然性がある場をつくりましょう

「小学校に入るまでに、45分間座れるようにしなければいけない」という考え方があります。もちろん、小学校は教科の授業があり、座って活動することも増えるのですが、現在の小学校の方向性としては、必ずしも「まず45分間座れること」を重視していません。むしろ、あそびを通して、主体的・協働的に学ぶ態度が重視されます。もし、まだ古い体質の小学校がある地域だとしたら、小学校とともに、現在の「架け橋プログラム」などの考え方を学ぶ機会をつくりましょう。

とは言っても、「座れなくてもいいですよ」という意味ではないのです。5歳児クラスの後半くらいになると、サークルタイムなどでの対話の場面で、自分の意見を言うだけではなく、他者の意見を聴きながら対話をするようになっていきます。しかし、ただサークルタイムの時間をもてばよいというわけでもありません。子どもたちが意欲的に話したくなるような、共通のテーマなどが生まれてくることが大切です。

例えば、保育室で虫を飼いたいけれど、どうやって飼うか、餌は何をやればよいかなど、みんなが共通して興味・関心をもっていることに意見を出し合ったり、発表会に向けて「どんなことを発表しようか」と主体的に話し合ったりすることです。みんなでしっかり話し合えるようになるには、話し合いの背景に、このような互いが協力し合う、協働的な活動があることが大切です。そういう活動が、結果的には子どもが集まり、座って話をする場を、自然とつくっていったりします。そして、座るための練習ではなく、みんなで話したり、他者の話を聴く必然性があるから、結果的に座って話を聴くようにもなっていくのです。

1歳児の生活を変えてみた！

一斉保育から個々に寄り添う保育へ

めぐみこども園（福井県）

子ども主体の保育への転換

2021年度までのめぐみこども園は、保育者主導で一斉保育の園でしたが、職員間で話し合いを重ね、子ども主体の保育への転換を進めてきました。

その年の1歳児クラスは17人の子どもたちを4人の保育者が見ていました。4月当初、1歳児クラスはお昼寝をしたくない子、食が進まない子、あそびにも集中できない子など、ざわざわと落ち着かない雰囲気でした。この時期のいつもの風景でしたが、1歳児クラスのリーダーは「本当に、環境の変化だけだろうか？」と、初心に戻って子どもたちを見守るようにしてみました。違う視点で子どもたちを見てみると、早い子どもは朝5時半に起きて、6時くらいには朝食をとっています。朝8時に起きて朝食をとる子どもとは、昼食時のおなかの空き具合が違うので、食事に

向かう態度も違ってきます。そこで、ほかの担任や園長とも話し合い、保育を一人一人の生活に寄り添ったものに変えてみようということになりました。

担任同士の語り合いで道を開く

それまでは、あそびの終わりの時間が近づくと、担任がおもちゃをどんどん片付けたり、昼食の配膳を一気にしたりと一定のルーティンがありました。一人一人の子どもに寄り添うように保育のやり方を変えたところ、当初4人の担任では手が回らず、フリーの保育者や管理職に協力してもらい、なんとか乗り切っていました。子どもたちは新しい保育にすぐ慣れましたが、担任のほうが慣れるのに時間がかかりました。

当初、「一斉保育のほうが楽だ」という意見も出ましたが、同時に「今のほうが子どもたちがのびのびしているし、最後まであそびたい子はあそんでいるから、もうしばらく様子を見よう」という意見もありました。そのころから、毎日子どもたちが午睡をしている時間に、フリーの保育者などに見守りをお願いし、ほかの保育室で振り返りをするようにしていました。

「給食のとき、落ち着いていたけれど、どんな工夫をした？」などの質問には、写真を見せ合いながら話し合いを進め、よいと思ったことを次の日には取り入れていきました。

このように、担任同士が試行錯誤しながら、子どもの姿をベースに、毎日の振り返りを大切にしています。

著者：大豆生田啓友（おおまめうだ ひろとも）
玉川大学教育学部乳幼児発達学科教授。乳幼児教育・保育学・子育て支援などを専門に、テレビや講演会のコメンテーターとしても活躍している。『「語り合い」で保育が変わる』『子どもと自然』『子どもと社会』（すべてGakken）ほか著書多数。

取材・写真協力：
新大船幼稚園
認定こども園神田保育園
めぐみこども園

スタッフ
編集制作：
小杉眞紀
カバー・本文デザイン：
エッジ・デザインオフィス　大六野雄二
校閲：
尾野製本所